

大阪城復興や関西国際空港、東京スカイツリーなど、土木・建築史に残る数々のプロジェクトに関わり、今年創業120年を迎えた大林組。今年5月に関西経済同友会の代表幹事にも就任された同社の大林剛郎会長に、企業として、また企業家としての社会貢献活動について伺った。

## 人こそが都市力の源泉 アジアに選ばれる関西をめざして

### ●御社の社会貢献活動の特色はどのようなものですか。

私たち大林組は、日々の生産活動の拠点である施工現場を国内外各地に持ち、地域の方々と日常的に接しています。社会貢献活動といえば、その現場単位で日常的に行っているというのが特色でしょうか。祭りなど地元の行事に参画する機会も多いんですよ。

企業本体としては、例えば広報誌「季刊大林」の発行があります。各界の専門家に寄稿してもらい、建築に関連する文化活動や将来期待される技術などを広く発信するものです。最新刊は「振動」をテーマに、建物単体ではなく地域全体を免震構造にする「ゼリー免震都市構造」や、振動を電気に変える方法といった夢の技術、建築に関わる文化や芸術などを紹介しています。また、大阪大林ビルの向かいのルポンドシエルビル(大林組旧本店ビル)に「大林組歴史館」を開設しており、今年創業120年を迎えた私たちの事業活動を紹介するとともに、大阪のまちや文化発展の歴史を一般の方々にご覧いただけるようにしています。

### ●建築以外で社会貢献に注力される意義について伺います。

私たちの本業は「モノづくり」というハードの提供ですが、それだけでは企業としての社会貢献を果たしきれていないと思います。つまり、経済や文化・芸術といったソフト面で都市や建物と関わる人々をサポートすることも、企業としての大事な社会貢献だという考えです。ハードとソフトは一体であるという考えは、父であり第3代社長の大林芳郎の持論でもありました。

父は大林家の私財を投入して「大林都市研究振興財団」を創設し、都市と関係する研究者や学生たちへのサポートをはじめました。現在は大林組も協力し、2年に1度「大林賞」を贈呈して、技術工学的な分野だけではなく、歴史、経済、美術、音楽などの研究や活動を支援しています。経済学者のポール・クルーグマン氏は、ノーベル経済学賞を受賞する以前に大林賞を受賞していたんですよ。

今や日本は、都市や建物をつくる技術で世界トップレベルです。しかし、ソフト面ではまだまだ発展途上だといえるでしょう。私たちは、そうした活動をサポートすることで、魅力的な都市づくりに貢献したいと思っています。

### ●大林会長が個人で参画されている「バックーズ・ファンデーション」では、どのような活動をされていますか。また、「現代アートレジデンス委員会」についても教えてください。

バックーズとは、さまざまな分野で活躍する人々をバックアップする人たちという意味で、50人ほどのオーナー型経営者が有志で集まって組織しています。1994年に社団法人日本動物福祉協会に助成金を送ることから活動をスタートし、現在は助成金事業だけではなく、会員自ら委員会事業を立ち上げ活動しています。

例えば、2005年に始めた教育事業の「バックーズ寺小屋」は、毎年20名ほどの小・中学生を公募し、よりよい社会人となるための心得や、リーダーとなるための資質を身につけてもらおうというものです。バックーズ会員の体験談を聴いたり、企業訪問をして大人たちが真剣に働いている姿を見たりするほか、合宿では野外活動やスピーチコンテストなどを通して、友情を深めつつ互いに競い合い、励まし合い、助け合う大切さを学んでもらいます。文章作成やプレゼンテーションスキルも学びますので、子供とはいえ大人顔負けのしっかりしたスピーチをしますよ。

「現代アートレジデンス委員会」は、私が2007年に立ち上げた事業です。これは世界の国々から選ばれた現代美術の作家やキュレーターを日本に招聘して滞在してもらい、その間の滞在費を負担したり、発表の場所を提供したりなど、創作活動を支援するものです。今年は5回目(5年目)で、これまでインド、シンガポール、アメリカ、ブラジル、インドネシアなどのアーティストを迎え入れてきました。彼らを支援する理由は、世界を舞台に活躍する彼らが、日本での経験をいろいろな国に伝えてくれるし、作品にも反映してくれる、いわば現代美術の重要なアンバサダー(大使)だからです。



広報誌「季刊大林」



大林組歴史館(内部)

### 大林剛郎(おおばやし たけお)氏

昭和29年東京都出身。昭和52年慶応義塾大学経済学部卒業後、株式会社大林組入社。昭和53年米スタンフォード大大学院に留学し建設会社経営などを学ぶ。昭和58年取締役。平成15年代表取締役会長。平成23年関西経済同友会代表幹事。

この事業を始めたきっかけは、日本に海外のアーティストを受け入れるプログラムが少ないということもありますが、私自身が現代美術を好きだということも大きいですね。現代美術の作品を買うこと自体がアーティストをサポートすることに直結していますし、なにより作者と実際に会える楽しみがあります。仮にピカソやモネの作品を買えたとしても、こうした楽しみは期待できませんからね。

### ●関西が都市としての競争力を高めるためには、どうあるべきだとお考えですか。

都市が力をつけるには、さまざまな分野で優れた人材が切磋琢磨していることが大切です。関西には、さまざまなモノづくりの技術や、有力大学をはじめとする教育機関があり、また各都市がユニークなカラーで人を惹きつけるポテンシャルを持ちながら、それらがうまくネットワーク化されていませんでした。そのため関西全体としての発信力が弱く、観光地としての京都や奈良は知られていても、それ以外の都市や地域の良さや魅力が知られておらず、人や企業が集まりにくい状況にあったと思います。

これを打破するためには、関西に行き、住みたくするような経済や文化といった都市のソフト力やシステムを整備する必要があると考えます。そこで関西経済同友会では、とくにアジアの優秀な人材を関西に集めるために、2011年度から「アジアが選ぶ関西」を考える委員会」を立ち上げました。アジアに開かれた地域としてアジアの人の視点から見た関西の魅力・強みの再発見や、統合型リゾート開発を含めた活性化の方策について、調査・研究しています。

今後、関西は独自のネットワークを持ち都市の魅力を高めることで、アジアの人々を集め、世界で活躍する人を輩出できると思っています。そこから世界との新たな絆が生まれることを願ってやみません。



### 株式会社大林組

大阪市中央区北浜東4-33(大阪本店)  
建設事業、不動産事業ほか。1892(明治25)年創業。資本金577億5,200万円。年商1兆1,318億円(2011年3月期・連結ベース)。従業員9,246名。